TSUNAGU

［繋ぐ］

Vol. 62
2025 SPRING

愛でる Special Issue:

紙のリングで組み上げる複層構造の球体アート

特別企画 日本の製紙業発展に功績を残した大川平三郎の足跡を辿る

拓く 国際紙パルプ商事が4社協働によるペットボトルの水平リサイクルを開始

愛でる 紙を愛する匠たち
「KAMI-WAZA 紙ワザ」

紙のリングで組み上げる複層構造の球体アート

リング状に切り抜かれた紙を格子状に組み合わせた球体のペーパークラフト。複数の層を重ねることで立体的に表現するファンタジーな世界観は、光を当てることでより幻想的な美しさを放ちます。多くのファンを惹きつけるもうひとつの理由は、網目状のきれいな球体が一瞬にして平面に閉じた状態に変形すること。手にした人にサプライズを与える球体ポップアップカードの魅力について、作者の月本せいじさんのインタビューをもとに迫ります。

TSUNAGU

TSUNAGU 2025 Spring

KPPグループホールディングスが発行するTSUNAGU（繋ぐ）は“紙の魅力再発見”をテーマに、紙と文化・紙と事業・紙と人を「繋ぐ」広報誌です。

愛でる …… P01
紙のリングで組み上げる
複層構造の球体アート

先どる …… P07
食品ロス削減を目的に誕生した
「サステナブルペーパー」

特別企画 …… P09
日本の製紙業発展に功績を残した
大川平三郎の足跡を辿る

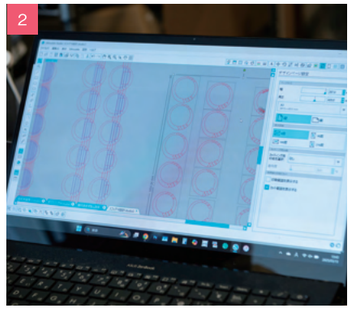
伝える …… P11
元電通社長から受け取った
往時を偲ばせる書簡

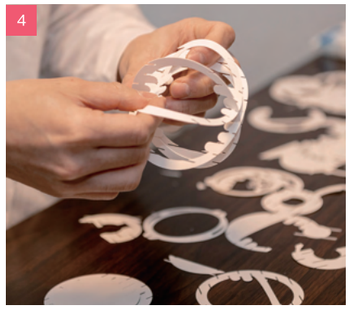
拓く …… P13
国際紙パルプ商事が4社協働による
ペットボトルの水平リサイクルを開始

訪ねる …… P15
本を中心に自然とコミュニケーションが
生まれる居心地の良いブックストア

作る …… 付録
エコモちゃんに装着して楽しめる
兜（かぶと）のペーパーフィギュア

■制作工程





1タブレットで描いたイラストのスケッチをパソコンに取り込み、微調整を加えながら図案化。2パソコンで球体設計図を制作して、モチーフを組み合わせていく。3〜6その後、プリンターで出力したデザインをプロッターでカットし、リング状のパーツを切り込みに合わせて組み上げることで作品が完成する。

本のページを開くと折り畳まれた図柄が一瞬で立ち上がり、目の前に立体的な世界が広がる「飛び出す絵本」。子どもの頃に感じたあの驚きとワクワクを詰め込んだのが、この「球体ポップアップカード」です。手のひらに乗せた平面状の白い紙に、横から軽く力を入れると一瞬で立体造形に変化する不思議な面白さは、カードを受け取った相手を笑顔にするものです。「複雑に見えるけど、それほど高度なギミックではないんですよ」。そう笑顔で話すのは、作者の月本せいじさん。組み立ての工程を実際に見せていただくと、図案に沿って切り抜かれたリング状のパーツを切り込みに合わせて噛み合わせるように接続していくことで、徐々に格子状の球体が組みあがっていきます。「球体にしたときにリングの切り込みが内部で噛み合い、カチッとロックがかかる構造になっています。その逆に、やさしく力を加えることで球体が崩れると噛み合った歯の部分が引っ込むのでぺたんこの状態に戻ります。設計を考えている段階では0.1ミリ単位での調整を繰り返す苦労がありましたが、この技法にたどり着いたとき、これならいけるかもという確信がありました」。

独自の設計によって生み出された彼の作品は、まるでマジックのような立体アートとして、瞬く間に大きな話題を呼ぶことになりました。

月本さんの作品が幅広いファンを惹きつけるもう一つの理由は、球体フレームの内部に複層的に描かれる繊細な切り絵にあります。そのテーマは、「白雪姫」や「赤ずきん」などの童話、「不思議の国のアリス」や「オズの魔法使い」といった児童文学など、ファンタジーな世界を題材にした作品が中心。主人公や動物たち、草花などのシルエットや装飾文字などを各階層にわけて配置することで、構成バランスのとれた奥行きのある作品に仕上がっています。「すべてのモチーフを重ならないようにきれいに並べるのではなく、意図的に一部が見えるようにデザインしています。見る人が作品を手に取り、角度を変えながら楽しんでほしいと思っています」と月本さん。また、切り絵のシルエットはフリーハンドによるやわらかいテイストを残すことを意識してデザインしているそうです。「球体自体は無機質なもの。だからこそ球体の中に組み込むモチーフは有機的で温かみを感じられるものにすることで、作品全体のバランスをとるようにしています」。

球体ポップアップカードは、光を当てることでその魅力が引き立つ効果も。光の色や照射する角度によって切り絵の輪郭がより際立ち、その複雑な陰影によってなんとも神秘的で美しい世界が浮かび上がります。

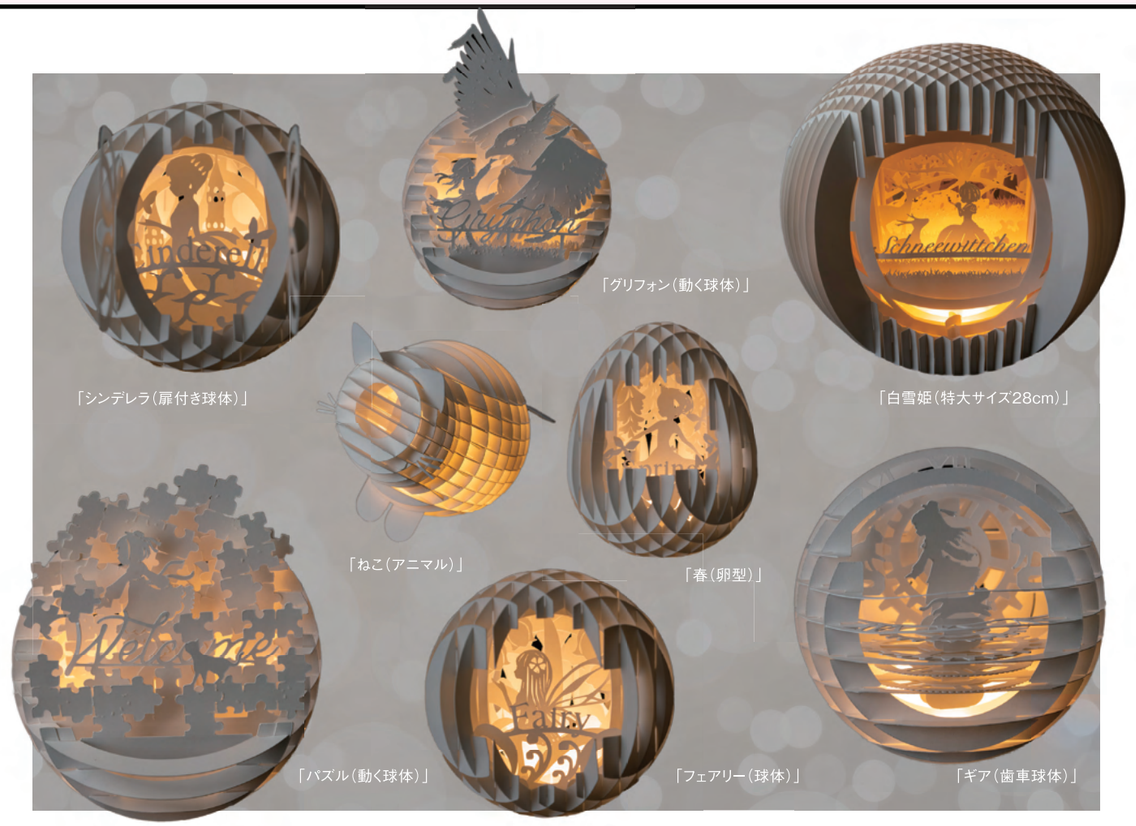
動きを楽しむ

受け取った相手を笑顔にするような作品の持つ驚きや美しさを追求していきたい

ポップアップカード作家

月本 せいじ さん　Tsukimoto Seiji

1990年生まれ、兵庫県出身。2013年に作家活動をスタート。代表作となる球体ポップアップカード「SPHERE」シリーズを発表後すぐに注目を集め、同年「楽天×Dクリエイターズ秋冬ハンドメイドコンテスト」において最優秀賞を受賞。2016年には初の著書『SPHERE 不思議な球体ポップアップカード』を発刊。その独自技法による美しい作品は各メディアでも頻繁に取り上げられ、国内外を問わず高い評価を受ける。
https://icuno.stores.jp/



「シンデレラ（扉付き球体）」
「グリフォン（動く球体）」
「白雪姫（特大サイズ28cm）」
「ねこ（アニマル）」
「春（卵型）」
「パズル（動く球体）」
「フェアリー（球体）」
「ギア（歯車球体）」

月本さんが作家としての活動を始めたのは2013年のこと。保育士になるために大学で学び、卒業後は保育士として働き出したものの、体調を崩したことを機に退職。もうひとつの夢であった「飛び出す絵本作家」になることを目標に、創作活動を始めました。「保育士時代、子どもたちの誕生日に立体的なバースデイカードをつくるのが楽しかったんです。第二の人生を始めるにあたって、好きなことに本気で取り組んでみたらどんなものができるのか挑戦してみようと思い立ちました。もともと飛び出す絵本の作家に対する憧れはありましたが、物語を創作するのは難しい。でも、〝仕掛け〟を考えることには自信があったので、絵本ではなく図柄が飛び出すカードならできるんじゃないかと考えたわけです」。月本さんは子どもの頃からものづくりが好きだったものの、プラモデルなど説明書どおりに組み立てるものにはあまり興味がなく、遊び道具やルールを自作し友だちを集めて遊ぶのが好きだったそうです。「3歳の頃にはサイコロの展開図をつくっていました」ということからも、目にするものを立体として捉える空間認識に長けていたことがわかります。

誰に習うでもなく、独学で得た技法を確立し、オリジナル作品を追求してきた月本さん。作品づくりにおいて、彼が自らに課す制約のひとつが素材を紙に限定すること。「ポップアップカードの作家として生計を立てるために工場で生産して大量に売ることも考えましたが、確実に売れる商品でないと、どの企業も相手にしてくれない。だったら、メーカーさんに頼らず自分ひとりの力で生産すればいいんじゃないかと考えたんです。紙だったら自分で印刷・加工ができるので生産コストの課題もクリアできるし、大量生産による在庫管理のリスクも低い。それに、糊やテープを使わず紙だけでつくるという条件があるからこそ、作品の驚きや美しさを追求する楽しさがあるんです」。材料には、組み立てるのに適した表面強度と平滑性の高いケント紙を選んで使用しているそうです。

「現在はアートイベントや展示会での販売と並行して、固定の雑貨店に販売業務を委託することで創作活動に専念する時間が増えました」と話す月本さん。今後の抱負を尋ねると、「球体のフレームをベースに、歯車を回すとモチーフが動く作品を増やしていきたいですね。あとは、サイズの大きいものや球体から飛び出すように、どんどん上にせりあがる作品もつくっていきたいと思っています。僕の作品は高尚なアートではなく、あくまでも日常のシーンを彩るアイテムであり、生活に密接したもの。贈り物にプラスすることで、受け取った方の笑顔が増え、部屋に飾ることで心が安らぐなど、送り主の気持ちに付加価値をもたらす作品づくりを続けていきたいですね」。常に現状のレベルを超えた作品をめざしているという月本さん。今後、さらに進化する作品に注目です。

BOOKS

これまでに4冊の著書を発刊。左から、「SPHERE　不思議な球体ポップアップカード」（2016年・グラフィック社）、「GEAR WORLD 歯車で動くポップアップカード」（2019年・グラフィック社）、「4つのカタチが楽しい 立体ポップアップカード」（2021年・グラフィック社）、「世界を旅するポップアップカード」（2022年・ブティック社）。

EXHIBITION

デザインフェスタvol.61

会期: 7月5日（土）・6日（日） 10:00〜18:00
会場: 東京ビッグサイト 西&南館

ペーパーワンダーランド2025 in 浅草橋

会期: 7月26日（土）・27（日） 10:30〜17:00
会場: 浅草橋ヒューリックホール

STORE

取り扱い販売店

不思議かわいい雑貨店 アランデル

住所:　東京都世田谷区奥沢3-44-3
営業日:　月・木・金・土・日曜日（火・水曜日定休）
営業時間: 11:00am〜18:00pm
ECサイト: https://arundel.shop-pro.jp/

EDGE of PAPER

食品ロス削減を目的に誕生したサステナブルペーパー

近年、深刻な社会問題として取り上げられる「食品ロス」。その影響は経済的な損失だけでなく、地球環境への悪影響も懸念されています。しかし、食べられなくなっても資源として有効活用できるものもあります。この食品ロス削減に向けた取り組みとして今、注目されているのが、未利用資源とパルプでつくる「フードロスペーパー」。これまでの経緯、商品の魅力について、株式会社ペーパルの矢田和也取締役にお話をうかがいしました。

株式会社 ペーパル

1890（明治23）年に創業した老舗の紙卸商。所在地の奈良県にとどまらず関西圏の印刷会社を中心に広く紙を提供している。メインの卸商事業にくわえ、近年は食品ロスなど社会問題の解決につながる製品開発を行うプロジェクトを立ち上げ、2021年に販売を開始した「kome-kami」が業界内外の話題を呼ぶ。

――「フードロスペーパー」を開発するきっかけは何ですか？

フードバンクの顧問をしている滋賀大学准教授の方と知り合ったことがきっかけです。フードバンクは、賞味期限が近いものなどを寄付してもらい、必要とする方に届ける活動をしている団体ですが、物流コストを寄付や自治体の助成金だけでは賄えきれず持ち出しになっている団体もある。そういった課題をビジネスで解決することで「持続可能な社会をつくりたい」という想いに共感しました。私たちが扱う紙を使って、食品ロス削減と必要な方に食品を届けるという2つの社会課題解決に貢献できないかと考えたのがこの「フードロスペーパー」の始まりです。

――はじめに原料として「お米」を選んだ理由は何ですか？

フードバンクのほか食品工場などにもヒアリングしたところ、届いた時点ですでに傷んでいたり、使いきれなくて廃棄されるお米があることを知り、それを原料にできないかと考えました。そこから調査を進めると、鎌倉時代の文献に「紙の原料にお米を使っていた」と記されたものがあったんです。また、木版印刷が盛んだった江戸時代には、浮世絵の発色をよくしたり、筆のにじみをなくしたりするためにお米が使われていたことを知り、お米を使った紙である「kome-kami」の開発に取り掛かることにしました。

紙の製造で使用する糊をお米でつくった「コメバインド」。化学薬品から自然由来のお米に切り替えることで、1ロット（5トン）を製造した際に出るCo^2を62.8kg削減できた。

――「kome-kami」の商品化までにどのようなご苦労がありましたか？

当初はお米をパルプに混ぜただけの混抄紙でしたが、紙の白さや発色の良さなどの機能性を引き出すために研究を続け、お米でつくった米糊である「コメバインド」を開発。これにより、通常、紙を破れにくくするために使用する化学薬品に頼ることのないサステナブルな「kome-kami」が完成しました。米には粘着性があるため、機械に付着して壊してしまうなど数々の困難がありましたが、2021年3月にようやく販売を開始することができました。

――「kome-kami」の特徴を教えてください。

「kome-kami」のラインナップとして、「ナチュラル色」と「浮世絵ホワイト」の2種類をご用意していて、どちらも自然な風合いと優しい手触りが特徴です。「ナチュラル色」は生成りがかった白さがあり、「浮世絵ホワイト」は紙の表面にお米でできた塗工液・コメグロスを塗布することで浮世絵のような風合いと発色の良さをめざした、白さが際立つ紙です。

――使用された方からはどのような感想が寄せられていますか？

製品の主旨をご理解いただいている多くの企業や自治体で、パッケージ、名刺、カード、カタログなど幅広い用途にご使用いただいていますが、しっとりした手触りの紙で、にじみが少なく書きやすいといったご感想をいただいています。

――興味を持った読者の方へのメッセージをお願いします。

「kome-kami」のほかにも廃棄される食品・農作物を使ったさまざまな紙を開発しており、今後も誰かの喜びになるとともに、社会課題解決につながる商品づくりを進めていきたいと思っています。これらの商品はつくって終わりではなく、この取り組みを拡大させることで、はじめて資源循環や困りごとを抱える方への支援の実現につながると思っています。私たちの考えに少しでも共感していただいた方、興味を持っていただいた方に、私たちの思いと自信を込めてつくった紙をぜひ一度お試しいただければ幸いです。

色味・風合いの異なる2種類のラインナップ

ナチュラル色

浮世絵ホワイト

食べられなくなったお米が原料

kome-kami

米

「kome-kami」を使用した、継ぎ目のないシームレスなパッケージ「kome-kami BOX」。

さまざまな廃棄食材・農作物を使った「フードロスペーパー」のシリーズ商品

※「フードロスペーパー」は売り上げの1%をフードバンクに寄付しています。

野菜や果物の皮などが原料

vegi-kami

にんじん

野菜や果物などを加工する過程で発生する皮など、通常は廃棄される部分を活用。素材の持つ色と質感が紙の表面に反映された商品。

廃棄となるモルト粕が原料

クラフトビールペーパー

モルト粕

クラフトビールを醸造する過程で出るモルト粕を紙に混ぜ込んだクラフト紙。箱やダンボールに利用できる「クラフトビールカード-FS」も販売。

CRAFT BEER PAPER

INFORMATION

株式会社ペーパル

住所　：奈良県奈良市池田町76-7
コーポレートサイト：https://www.pepal.co.jp/
ブランドサイト　：https://foodlosspaper.com/
インスタグラム ID：kome-kami_paper
※導入事例はインスタグラムにて紹介しています

コーポレートサイト　ブランドサイト　インスタグラム

「フードロスペーパー」を採用する企業・自治体がますます増加

SDGsに貢献する紙として、「フードロスペーパー」を導入する企業や自治体が増え続けています。自然由来の製品パッケージや、なめらかな書き心地を活かしたノート類、さらにはSDGsへの企業姿勢を示す名刺など、業界を問わずフードロスペーパーの利用が広がっています。

Heizaburo Okawa

大川 平三郎

日本の製紙業発展に大きな功績を残した偉人

大川平三郎翁（坂戸市立中央図書館所蔵）

［PROFILE］大川平三郎（1860－1936）1860（万延元）年12月7日、武蔵国川越藩三芳野村（現・埼玉県坂戸市横沼）出身。13歳で親戚に当たる渋沢栄一の書生として仕え、1875（明治8）年に職工として抄紙会社（後の王子製紙）に入社。米国に留学し、製紙技術を習得、技術部門の要職を務める。専務就任後、幹部の意見対立のため、渋沢栄一とともに退社。以後、九州製紙、中央製紙、樺太工業などを設立。さらに四日市製紙、富士製紙の社長に就任するなど数多くの製紙会社に関わったことから「日本の製紙王」と呼ばれた。1928（昭和3）年に貴族院議員に勅選。1936（昭和11）年12月30日死去。享年77歳。

大川平三郎と製紙産業

大川平三郎は1860（万延元）年、川越藩三芳野村に大川修三の次男として生まれ、暮らしに事欠く非常に貧しい家庭で育ちました。生活する中で母の苦労を目の当たりにし、「早く大人になって母に楽をさせてあげたい」という思いを抱き続ける日々を送ります。その後、1872（明治5）年13歳の時、叔父である渋沢栄一を頼って上京して渋沢家の書生となり、その傍ら、大学南校（現・東京大学）に通いおもにドイツ語を、独学で英語を習得しました。しかし大川家の暮らしが貧乏のどん底であることから、「勉強どころではない」と、1875（明治8）年16歳で渋沢栄一が経営していた抄紙会社（後の王子製紙）に入社。機械・製図の技術を覚え、外国人技師よりも確実な力をつけました。そして1879（明治12）年20歳の時、製紙法を学ぶため自ら志願してアメリカに留学。従来ボロ布を原料として紙を抄紙していましたが、帰国後、技術改良を重ね、日本で初めて稲わらパルプ（わら半紙）の大量生産に成功しました。また、1884（明治17）年25歳で再び渡米し製紙技術を学び、我が国最初の木材による化学パルプの製造にも成功しています。また、大変優れた技術者としてだけでなく、同時に企業家としても活躍しました。製紙業はもちろんのこと、セメント・電力・製鋼・鉄道・金融など80有余の会社経営に携わりました。製紙では、王子製紙を辞した後に熊本の九州製紙・岐阜の中央製紙を設立。大阪の中之島製紙の経営にも携わり、のちに資源豊富な樺太の泊居（とまりおる）・真岡（まおか）・恵須取（えすとる）に樺太工業を設立するに至りました。その後富士製紙の社長に就任し、一時期大川系の製紙会社は国内市場の45％を占めるまでに拡大したことから、「日本の製紙王」と呼ばれました。

大川平三郎と郷土坂戸市

大川は、叔父・渋沢栄一より薫陶を受けた「論語」の精神を貫き、故郷である三芳野のために心を砕き、力を尽くしました。請われて三芳野村青年団顧問や三芳野村信用購買組合（現JAの前身）理事長となり、村の発展に寄与しました。貧乏追放の一つとして、むしろ織の副業を奨励するなど、村全体の「チカラ」を高めるためにも尽力しました。さらに、たびたび洪水に見舞われていた村のために私財を投じて小畔川（こあぜがわ）に堤防を築き、三芳野小学校の増新築や校庭拡張にも巨費を投じました。大川は資金を全額援助するのではなく、村人にも負担させたり、堤防造成の折には工賃を出して生活の足しにさせるなど、村人たちが故郷を慈しみ大切にする心、皆で力を合わせ、自分たちの力で生き抜く事も併せて育みました。これこそが、徳を大事にする「論語」の精神です。

埼玉県深谷市所蔵

［大川家略系図］

- 富岡製糸場の初代場長　尾高惇忠
  - 千代 ＝ 渋沢栄一（日本資本主義の父）
  - みち ＝ 修三
    - 元日出紡織社長　大川英太郎
    - 元山陽パルプ会長　大川鉄雄
    - ＝ 大川 平三郎（日本の製紙王）
      - ＝ 照子
        - 元大日本人造肥料会社社長　田中栄八郎
      - 元高千穂製紙社長　大川義雄
      - 元本州製紙会長　田辺武次 ＝ 孝子
      - 元市川毛織社長　迫本実 ＝ 貞子

大川平三郎と渋沢栄一

大川平三郎の母・みちと、渋沢栄一の正妻・千代、そして富岡製糸場初代場長の尾高惇忠（あつただ）は、兄弟姉妹です。渋沢は尾高塾に通い、論語をはじめさまざまな知識を学びます。この時に出会った「論語」は渋沢の心に刻み込まれ、大川は渋沢から「論語」の精神を学び、尾高・渋沢・大川は「論語」の精神で深くつながっていたと言えるでしょう。母・みちは、生活が苦しい時何度も渋沢夫人である妹に借金に行っています。その姿を見て育った大川は、何としても母に惨めな思いをさせたくないと、勉強より仕事を優先させたのでしょう。一つの贅沢もせずに子どもたちのために必死でがんばる背中を見て育った大川。66歳の時、自身のように勉強したくてもできない環境にある埼玉県内の学生のために「大川育英会」を設立しました。大川育英会は、多くの人材を育て、企業家や政治家などを輩出しています。

坂戸市 大川平三郎を広める会

「坂戸市 大川平三郎を広める会」は、郷土坂戸市の偉人であり論語の心を常に持ち続けた「日本の製紙王」大川平三郎を多くの市民に周知して欲しいとの思いで発足しました。坂戸市立図書館内「日本の製紙王 大川平三郎」展示コーナーにそろう資料の多くは、図書館長が公益財団法人紙の博物館に通い書き写し、集めた努力が認められて移譲されたものです。

大川平三郎の偉業を広め、伝え続けるために彼の生涯を綴った「郷土の人　大川平三郎」は、実践文章教室の方々が作成した本を参考に執筆しています。また、小学生向けに「郷土さかどの偉人 日本の製紙王 大川平三郎」の原稿執筆を行い、図書館より出版。その書籍は地域の小学校へ寄贈されています。そのほかリーフレットの原稿執筆等、さらには大川平三郎の生誕から偉業達成までを分かりやすく伝える手づくりの「紙芝居」を製作し小学校や地域のコミュニティーで上演したり、講座を開催するなどしています。

「坂戸市 大川平三郎を広める会」では、郷土の偉人大川平三郎の資料整備のほか、講義、紙芝居の読み聞かせなどを定期的に開催している。

「日本の製紙王」とKPPグループホールディングス

KPPグループホールディングスは、昨年創立100周年を迎えました。当社の前身である大同洋紙店は1924（大正13）年11月27日に大阪に誕生しました。創業に際して当時、樺太工業の社長を務めていた大川平三郎氏の支援を得て、大川系製紙会社である樺太工業、中央製紙、九州製紙の総代理店および富士製紙の特約店として事業をスタートしました。また大同洋紙店の社名は、〝大川平三郎氏と心を同じくする〟という意味から、大川の「大」と同じくするの「同」をとり、名付けられました。

大川堤遺跡（坂戸市立中央図書館所蔵）

1925年大同洋紙店創立披露宴の様子。樺太工業社長・大川平三郎氏、大阪朝日新聞社専務取締役・下村 宏氏から祝辞を賜った。

樺太工業真岡工場
（京都大学附属図書館所蔵）

「手紙」は語る

人間は表現する動物だというが、
手紙は人間の表現のなかでもっとも深く高貴なものだと思う。
手紙は手書きがいい。眼光紙背に徹すれば、書き手の人となりが見えてくる。

植村鞆音

第四十回　木暮（こぐれ）剛平（ごうへい）

昭和六十年から平成十四年まで十七年間電通の社長・会長をおつとめになつた木暮剛平さんのことを書こうと思つて手紙を探したが、文庫化された父清二の著書『中国史十話』の受けとりの礼状、わたしが書いた父の評伝『歴史の教師　植村清二』の出版記念会出席のご返事、あと年賀状の類くらいしか見当たらない。その代わり、城山三郎さんに関する資料の入った分厚いB4の封筒が見つかった。会社の封筒の表には、木暮さんの鉛筆の字で「城山様の記事」と書いてある。入っていたのは、「ほほづゑ」という財界人の文芸小冊子のほかに、同誌に載った「私の友達」、月刊文藝春秋のアンケートに答えた「私の『無所属の時間』」、月刊文藝春秋の随筆「俳句と私」、掲載誌不詳の「私の好きな店」、「本棚から」、城山三郎さんから木暮さん宛の手紙、スリーハンドレッドクラブ※のスコアカードなど。「ほほづゑ」以外はぜんぶコピーである。

このたくさんの書類を木暮さんに頂戴したのは、たぶん平成二十二年。わたしは城山三郎さんの評伝『気骨の人　城山三郎』を執筆中だった。城山さんと木暮さんは同じ茅ケ崎在住で、しかも同じスリーハンドレッドクラブのメンバー、お互いを信頼し合う友人同士だった。わたしが城山さんのことを一冊の本にしようと思いたったのは、城山さんが亡くなった平成十九年から三年を経た平成二十二年のことだが、なにかの機会にそのことを木暮さんに伝え、それなら関係資料がいくつかあるのであげようといっていただいたのだったと思う。封筒には宛名も切手もないから、ご本人から手渡されたか、電通の局担のだれかがわたしに届けてくださったかどちらかだろう。

封筒に入っていた書類で、城山三郎さんに直接関係のあるのは、城山さんから木暮さんに宛てたゴルフ同行の礼状である。日付は三月二十八日となっているが、文面に「昨日のゴルフ」とあり、さらに欄外に木暮さんが2005年と書きこんでくださっているので、これが平成十七年三月二十七日のゴルフだったことが判る。二十七日に城山さんは木暮さん、石原信雄官房副長官と一緒にスリーハンドレッドクラブでプレイし、「たっぷり勉強させて頂いた」というお礼の言葉のあとに、「かつて日本銀行のNY駐在員だった井上準之助が友人たちとゴルフを楽しんだことを日本の家族に書き送った手紙の最後に、Only regret bad score.と結んでいるが、まったく私も似た思いでした」と書き綴っている。いうまでもなく井上準之助は、浜口雄幸（おさち）とともに城山さんの『男子の本懐』の主人公である。同封された当日のスコアカードを見ると、木暮アウト46、イン43、グロス89、城山アウト60、イン60、グロス120、石原アウト62、イン60、グロス122となっている。「私の友達」は木暮さんによるゴルフ仲間の紹介である。桜の花をバックにした四人の写真つき。木暮さん、城山さんのほかに五木寛之さんと西日本新聞社の元社長、青木　秀（ひで）さんの四人。桜の花を見ながらのゴルフというのが主旨で、三人は木暮さんご自慢のゴルフ仲間だった。城山さんの亡くなった後、木暮さんは桜の時期にわたしをスリーハンドレッドクラブに誘ってくださったが、あれは城山さん追悼の意味があったのかもしれない。

「私の好きな店」は、有名人による贔屓の店の紹介だが、木暮さんは城山さんから紹介された茅ケ崎の「柚（ゆず）の木」をあげている。「浜作」で修業したご主人・三上（旧姓金山）勝さんが奥さんと二人でやっていた小さな店だ。「相模湾におまかせ」という刺身の皿がおすすめで、城山さん亡きあと、ご家族にわたしもここでご馳走になった。

「無所属の時間」というのは、城山さんの著書『この日、この空、この私―無所属の時間で生きる』のタイトルでもあるが、どこにも誰にも所属しない自分だけの時間を自由に使おうという考え方である。木暮さんは文藝春秋のアンケートに答え、これからは俳句とゴルフ、とくに俳句に時間を使いたいとおっしゃっている。俳句を嗜むようになったのは、広告人として「言葉の感性を高めたい」という潜在的な希求が自身の中にあったからではないかと答えている。句作は自分の中に隠れている「創造する心」を磨くこと。それはとりもなおさず「物事に潜んでいる本質を確認することであり、経営の判断に資することでもある」と。

木暮さんは平成二十年に八十四歳で亡くなった。木暮さんは旧制新潟高校で父の教え子だったし、広い意味で業界の大先達だったので、かなり早い時期から名前は知ってはいたが、直接の知己を得たのは、わたしが五十歳に近づいた頃だったと思う。わたしが東京のテレビ局の編成を担当していた頃で、木暮さんは電通のばりばりの現役社長だった。恩師の長男ということでなにかと目をかけていただいた。新潟高校の先輩に文藝春秋の社長だった池島信平さんがいらして、彼がまた父の東京五中での教え子であるという縁もあった。わたしが退職後著述業を目指しているなどと漏らしたからだろうか、電通出身の作家新井　満（まん）さんと麹町の料亭でご馳走になったり、先に記したとおり、城山さんなき後もゴルフに誘っていただいたりした。

木暮さんは文化の香りのある経営者だった。電通の社長の中では珍しい存在だったかもしれない。「無所属の時間」の最後の質問、「情報の確保の仕方」の答えに木暮さんは父植村清二の授業でのエピソードを紹介している。東洋史の教師だった父が、「百聞は一見に如かず」に続けて、「百聞また一読にしかず」という言葉を教えてくれた。それが強く印象に残り、その後の生き方の指針になった、と。読書によって得た情報や知識は増幅し感動も深まるというのだが、たしかに読書による智の世界は人生の価値を高めてくれる。

※スリーハンドレッドクラブ……日本の政財界約三百人だけがプレーすることのできる会員制の名門ゴルフコース、神奈川県茅ケ崎市。

著者略歴
植村鞆音（うえむらともね）　エッセイスト

小説家・直木三十五の甥、東洋史学者・植村清二の子として愛媛県松山市に生まれる。1962年早稲田大学第一文学部史学科卒業後、東映を経てテレビ東京に勤務。同局常務取締役、（株）テレビ東京制作代表取締役社長等を歴任。2006年受賞『直木三十五伝』（https://www.rsl.waikei.jp/prize01.html）で尾崎秀樹記念・大衆文学研究賞受賞、2007年『歴史の教師植村清二』で日本エッセイスト・クラブ賞受賞。主な著書に『夏の岬』『気骨の人 城山三郎』など。

木暮　剛平

実業家
1924-2008

1924年9月19日生まれ、群馬県勢多郡赤城村（現在の渋川市）出身。1947年に東京大学経済学部卒業後、電通入社。以後、順調に昇進し、1985年に第8代社長、1993年に初代会長に就任。1989年に電通を国内広告会社で初めて売上高1兆円超達成の偉業を成し遂げる。また、経営者としての活躍以外にも、映画『敦煌』の制作統括、国際俳句交流協会（現・国際俳句協会）の会長を務めるなど文化芸術の振興にも広く貢献した。2001年、勲一等瑞宝章を受章。享年84歳。

持続可能な社会実現に向けた、KPPグループのあくなき挑戦をご紹介

KPP Sustainable Times

限りある資源やエネルギーを循環・再生させることは、現代社会において極めて重要な課題となっています。当社グループの使命である「循環型社会の実現に貢献する」に基づき、事業を通してサステナブルな社会づくりに貢献し、企業価値の向上を図っています。

国際紙パルプ商事が4社協働による ペットボトルの水平リサイクルを開始

2025年2月21日、福岡県内にて、株式会社サンリブ、サントリーホールディングス株式会社、サントリー食品インターナショナル株式会社、国際紙パルプ商事株式会社（以下KPP）の4社による、ペットボトルの水平リサイクルに関する協定締結式を行いました。この協定は、業界全体の循環型経済の推進と、持続可能な社会の実現をめざす重要な一歩となります。

本取り組みは、ペットボトルの再利用を効率的に行い、再生資源としての活用を最大化する「ボトルtoボトル」方式の水平リサイクルを推進することを目的としています。各社の技術力とネットワークを活かし、ペットボトルのリサイクル率向上をめざして協働していきます。

協定締結式は、株式会社サンリブ本社にて行われ、協定の趣旨説明が行われたのち、協定書の内容確認が行われました。その後代表者による協定書の交換が行われました。

KPPグループは、今後も紙に限らずさまざまな商材・サービス分野で、循環型ビジネスの推進に取り組んでまいります。

左から、サントリーフーズ株式会社 執行役員 九州支社長　森本 裕氏、サントリーホールディングス株式会社 サステナビリティ経営推進本部 副本部長　関 学氏、株式会社サンリブ 代表取締役社長　眞田義文氏、国際紙パルプ商事株式会社 取締役 常務執行役員　清水弘貴

■「ボトルtoボトル」方式の水平リサイクルの流れ

Comments

この協定により、持続可能な社会の実現に向けた大きな一歩を踏み出すことができた
株式会社サンリブ
代表取締役社長　眞田義文氏

サントリーグループとしても環境への取り組みを一層強化し、循環型社会の実現を支援していきたい
サントリーホールディングス株式会社
サステナビリティ経営推進本部 副本部長　関 学氏

本協定を通じて、リサイクル技術の革新を加速させ、業界全体での効率的な資源活用を目指していきたい
国際紙パルプ商事株式会社
取締役 常務執行役員　清水弘貴

創立100周年記念サイトにて 新企画「100のサステナビリティ」コーナーを公開

当社は、昨年11月27日に創立100周年を迎えたことを記念して開設した特設サイトに、これから先の100年へ向けての新企画「100のサステナビリティ」コーナーを公開しました。

「100のサステナビリティ」は、KPPグループに所属する社員たちより100のエピソードを集めた特別企画です。今回、国際紙パルプ商事、スパイサーズ、アンタリスをはじめとした100名を超える社員が実際に携わったサステナビリティ活動の実例を紹介しています。

KPPグループのサステナビリティへの取り組みは、社員一人ひとりの具体的な行動として実践されています。持続可能な社会の実現に向けた各エピソードをぜひご覧いただき、私たちの取り組みに触れてみてください。KPPグループはこれからも社員とともに、より良い未来を築いてまいります。

100の サステナビリティ
https://100th.kpp-gr.com/media/sustaina

ご紹介している エピソード例

環境に優しい製品開発
環境負荷を最小限に抑えるため、グループ内では再生可能エネルギーの導入や、エコデザインを取り入れた製品の開発を進めています。

地域社会への貢献
地域社会とのつながりを深めるためのプロジェクトを多数実施しています。地元の教育機関との連携や、地域での環境啓発活動などが代表的です。

従業員の多様性推進
KPPグループでは、多様性を尊重した職場づくりを進め、性別や年齢に関係なく活躍できる環境の整備に力を入れています。

生物多様性の保全活動
環境NPOと協業し、植林活動を通して重要な生態系の回復、炭素の隔離、生物多様性の増進をめざしています。新たに植えられた樹木は、地元の野生生物にとって不可欠な生息地へと成長します。

サステナビリティの評価と報告
サステナビリティ活動の透明性を高めるため、定期的に取り組みの評価とその報告を行い、第三者の意見を積極的に取り入れています。

編集後記

人間はとても多面的で、自分が見ているのはその人のごく一部だということを時々忘れてしまいそうになります。

そんなことを考えたのは、特集でご紹介した月本さんの球体ポップアップカードを見たときでした。思っていたよりもずっと小さな面がバラバラの状態から、カチャカチャと組み合わさり、ひとつの球体を形作っていく。その様子が、人の在り方に重なって見えたのです。

私たちも、さまざまな面が折り重なり、強くなったり、時には脆くなったりしながら生きていて、経験を重ねる中で「これだ」と、面がぴったりはまる瞬間に出会うことがあるかもしれません。

月本さんは、もともと保育士を目指していたそうですが、就職後自分の向き不向きを考えながら、その道を断念されることとなったそうです。仕事を辞めて、家に帰れば目の前には保育関連の本ばかり。そんななかで「どうせ夢を諦めるなら、新しい夢をつくろう」と思い、自分の好きなモノづくりへと向かわれ、そしてたどり着いたのが球体ポップアップカードだったそうです。

生きていると「やっと見つけた」と思った人やものや夢が、自分の理想とは違っていたことに気づくことがあります。何度もやり直しながら、歩む道を探していくことの繰り返しで自分を構成する面は増え、いつかの困難に備えられるのかもしれません。

新学期が始まりました。春の訪れに期待や希望が膨らむ方も、何かに落ちこまれている方もいらっしゃるかもしれません。本誌は世界中どこからでも、どんな気持ちのときも、紙の世界で読者さまをお待ちしています。

（加藤智香）

NEW STYLE BOOKSTORE -Vol.17-

Snow Shoveling Books & Gallery

スノウショベリング
ブックス アンド ギャラリー

東京都世田谷区深沢4-35-7 2F-C
TEL　：03-6432-3468
営業時間：13:00〜18:00
定休日　：火・水曜
http://snow-shoveling.jp/

本を中心に自然とコミュニケーションが生まれる、居心地の良いブックストア

駒沢公園に近い閑静な住宅街の一角に建つ一般的な集合住宅。1階のガレージの奥を進んだ先にある階段を上がったマンションの一室に、隠れ家的な本屋・スノウショベリングはあります。「うちは、かっこつけた本屋でありたいと思っています」。そう話すのは、店主の中村秀一さん。中村さんは10代から20代前半まで世界中を旅したのち、グラフィックデザインの仕事を経て2012年にこの本屋を開店しました。「旅先や社会に出てからも、何か差し迫った状況で思いがけず本から得た知識が役立つ場面がたくさんありました。本は人生で役に立つものだし、“本を読むのはかっこいい”というイメージを広めたいという思いもあって、インテリアやレイアウトにこだわった本屋をはじめました」。

間接照明の柔らかい光が点在する店内を見渡すと、いかにも居心地の良さそうなソファとテーブルが目につきます。「自然と会話が発生するように、みんなの視線が集まる位置に置いています。店の中と外では人との距離感が違うので、初めて会ったばかりの人同士が本や音楽、哲学や政治の話で盛り上がる光景が日常的に見られます」と中村さん。そのほか、スノウショベリングでは、本や作家についての思いを語り合うブッククラブ（読書会）も定期的に開催しています。

スノウショベリングでは、店内での会話だけでなく、食事の持ち込みも、ギターを弾くことも禁止していないそうです。「みんなはルールを求めがちですけど、それにはまって行動するのはあまりにも受動的すぎるんじゃないかと。だからこそ、この店にルールをつくらず自由にしてくださいと伝えています。こんな風に使っていいですか、と利用者の能動性を発揮できる空間として利用してほしいと思っています」と中村さん。自然なコミュニケーションを促す工夫が詰まったスノウショベリング。その魅力をぜひ実際に確かめてみてください。

「この店に来ることが、自由とは何かを考えるきっかけになってくれたらうれしい」と話す中村さん。

KPPグループホールディングス株式会社
KPP GROUP HOLDINGS CO., LTD.
発行：グループ人事本部 グループコーポレート・コミュニケーション室
〒104-0044　東京都中央区明石町6番24号
TEL（03）3542-4166（代）
https://www.kpp-gr.com/
TSUNAGU公式インスタグラム
ID：kpp.tsunagu
ぜひフォローをお願いいたします!

RICE INK
輸送マイレージとCO2排出を抑え、地球温暖化に配慮したライスインキを使用しています。

Eco・Press Binder
針金・糊・熱が不要な製本方法を採用し、リサイクルや怪我の危険へ配慮しています。

「TSUNAGU」Vol. 62 使用紙：雷鳥マットコートZ（127.9g/㎡・中越パルプ工業株式会社）しなやかな手触りと優れた可読性を持ち、印刷面のグロス感も抜群なマットコート紙です。